



北村透谷夫人を訪ふ

須川末子

「いろ／＼と新聞の種にされることですね」

と脇を向いて、丁度手の届くところにあつた花瓶の夏菊の枯葉を摘まられる。歩いて来たので暑くもあり極りが悪くもあり、ちら／＼使ふ扇の間にそつとあたりを見廻すと、支關ともつかず居間ともつかぬ、下駄を抜いて直ぐに座つた三疊の隅に、オルガンが一臺据ゑられてある。

廊下を背にして座られた夫人は、軽るさうなモスリンの細かい白緋に黒のおみ帯して、白い襟の覗いて居る胸元もあつさりとして居られる。

「なか／＼こんなことをして居る隙はないんですけれどもね、今日は折よくまア一寸手が空いて居るんですよ、眞實に珍らしいんですよ今日のやうな日は」

と疊の塵をつまんで膝の上に運んで度々かう仰言られるのも御道理、日々會話のお稽古に通つて來られるお嬢様方をすましてから、ちよいと茲々と頼まれた翻譯ものなども爲さなければなるまいし、夜は夜と夜學

の生徒さん達が詰められるとのこと、その上一週に三度は府下の某師範學校の教壇に立たれるのだから、ふいと飛び込んだ私はこの上もない果報者と、貴重な時間を裂かれたのを感謝しなければならぬ。

そこで猶豫なくすん／＼と話を積んで行けばいいのだけれど、生憎この節々々の女學雜誌で流行の、私が無々とした時の實驗だとかと何とかいふやうな、そんな問題を持つて居ない私は、夫人に對し時間に對し、甚だお氣の毒なわけだと氣が揉めて來た。たゞ未亡人が近況を見聞きすれば、それで私の使命は終るのだが、座談が下手なので思ふやうにお話を捕へることが出来ない。

「貴女達のお商買はなか／＼忙しいでせう、お暑いのに大變ですわね」などと却て勞はられて恐れ入るばかり。

「お嬢様はどうなすつてらつしやいます、もうよほどおみ大きくおなりでございませう」

位なことをぼつり／＼伺つて見る。

「え、今一緒に居りますよ、さうですわね造作のないものですわね子供の大きくなるのなんては」

透谷先生がお亡くなりになつた時、お嬢様のお年はお幾つだつたかといふと、廿五年に生れたのだから數へて見たらわかるでせうと言はれて、自分の生れた年に四つ加へて、その四つを自分の今の數へ年から減いて見ると、胸算用には十九と出た、おみ大きくおなりでございませうなどと仰つたのが極りが悪くなつた。

「藤村さんの『春』でございませぬ、あれをお読みになつた時にどんな感じがなさいましたか？」

「別段どうつてこともありませんねえ。あの人達は材料として、御自分の作の材料としてお使ひなさるんでせうから仕方がないでせうよ、それに私は自分のことを書かれてもさう讀んで居ませんから……今度會つたらもう昔のことなんか書かないでくれつて言はうと思つてますが其後少しも會はないから」と聲低く稍々獨り言じみ、「訪問してみようと思つても此通りの忙しい體ですから……エ、まア事實は殆ど事實でせうね、今更透谷の日記を繰り返したりして……でも彼の時代のことを書いたら勢ひ書かれなけりやならないのでせうよ」と直ぐにまた言ひ足された。

所謂ふうちゃんと呼言るお嬢様であらう、派手な浴衣の方が庭下駄を履いて降りられると、壁に手をついて體を捻ぢむけて、

「そら此方の方のなよく取らなくちや不可いよ、そのが一番害をするんだから」

と壁をかけられる、メレンスの帯が後向きになつて踞る上には、やう／＼木らしくなつた桃の枝がさし駢して、家と家の間に狭く取つた庭の青葉の中に、二つばかり咲いたダリヤの鉢が置かれてある。青い薔薇の筒を頂きにつけて、鐵砲百合の背の高いのが稍々傾いて居る。

思ひもかけず未亡人と殘されて、それから間もなく九年といふ長い間米國で暮すに至つた其當時のお覺悟のことなど一寸伺つて見る。

「なアに別段大した覺悟つてこともありませんでしたねえ。一週間ばかりの間に一寸決つてしまつて、行つて見てはどうかつていふんで、その運れがよかつたものですから……もとより子供は一緒に居ませんでしたが、別々になつて居て」

早くからお祖母さんの許に引き取られて、女の子のない家内の寵兒となつて居たのださうだ。

「情に負けるといふことはあまり好いことでもありませんけれど、また其處に眞の親の愛情といふものが含まれて居るのかも知れませんが、私にしたところで、まだ若いのに何處かへなんて言はれもしましたけれど子供が親といふ蔽ふものもなくて育つのは、其子の爲め第一の不幸だと思つたり、子供の前途を見届けてやらなければ親の義務がすまないやうな氣がしたり、それやこれやまたどうせ何かして生きて行かなくちやならないのならいつそ生き甲斐のあることをして見たいと思ひましてね」

「どうかまあ一人でも二人でも、社會に立つて折角稽古したことを役立つてくれるやうにと願つてますが、私の骨折りがそこまで行きますかどうか、なんだかちつとも譯が解らない」

横を向かれるとまた暫く話が切れる。私はふと先達て或る人から、貴女はよく目をパスするが態と冷やかな態度を装ふやうで厭な氣がする、と言はれたことをどういふ譯か此時思ひ出した。

「兎に角日本にはさう遣つて居る人はないのだから、講壇に立つたらどうだと言はれますけれど、そんなことはあまり望んでも居ませんから……」

「それよりもどうかしてかう……」

私は以前、もう餘程昔のことではあるが、ある雑誌で新歸朝者の透谷夫人が、女子の教育に就ての抱負を語つて居られたのを覚えて居たので「何か學校でも……」と早速口を入れた。

「エ、まあ何とかして實用の方面のそんなものを遣りたいと思つてますが……なんですかさつぱり」

「でも計畫は出來つて居るのでございませう」

「エ、……まあなんですかちつとも進みませせん」

後はそれに就ては話の綱を手繰るすがも無い。暫くして、

「私はなんです、今の教育に伴ふ弊害といふものを恐れますね、どうかして、そんな弊害を伴はないやうな方面を開拓して行きたいと思つてますが、なんですよ世間の人は私をかう、或る意味でいふやうなハイカラな考へを抱いて居るものと思つてるか知れませんが、私はさうでもないんですよ。それは洋服も着ますし、英語もシヤベリはしますけれどもね」

確か夫人は其雑誌の記者の説くに、日本婦人の美點と亞米利加婦人の長所を搦き交ぜたところに理想を置かれたやうに覺えて居る。

門の戸がチリン／＼鳴つたと思ふうちに、敷石に靴の音がして、「御免下さい」

と人が來た。ちらと後を振り向いて見ると、ステツキを持つ背廣の人が立つて居る。私の脇の部屋の障戸を開けて應對に出た人が、

「あ」

と聲を發したので知り合ひの方だといふことがわかる。背廣の人は、私が夫人との間に置かれた座蒲團の上で目を落して居るうちに、導かれて廊下に添つて曲つた座敷の中にはいつて行つた。そこは教室のやうな具合にでもなつて居るのらしい。

たゞ／＼話は文士の上によつて、

「文人の妻になつてなる人は可愛いさうですれ、覺悟をして受けばそれはいいやうなもの、見じめですから、それでも今は大分進んで來ましたから透谷の時代のやうに苦しくはないでせうけれど、あの頃なんかでんで雇つてくれ手がありませんでしたよ。今の方達は片つ方て職業を持つてやつて居られるからいいですけれど……透谷の友達で今文壇に残つて居るのは秋骨さんに藤村さんでせうね、あゝさうですか何かに書いてましたか、藤村さんもあゝいふ詩人の方ですから時々思ひ出して下さるのでせうよ、エ、まあ訪れて下さつたこともありますが二度位のものでせうよ、平田さんさう／＼禿木さんですれ、それでもあの方は時々生徒などを紹介してよこしてくれまますよ」

今のお客さんもさぞ待つて居られるだらうと思つたら、もう落ち着いて居るのが勿體なくなつて、お話の切れ目を一にちり後に退さつて、

「どうもお忙しいところを……」

とびたりお辭義をした。

「いえどうしまして、さつぱり要領を得ませんでした」

なんの／＼、たゞ夫人にお目にかへり得さへすれば、それで私の目的は達して居るといふもの、またお高説を叩く折もあらうと、鼻屑の跡びを心でして表へ出た。

改めて門を仰いで見ると、障戸の表札は美しくMina Kitamuraと書かれて、上の方には實用英語會話教授の字を讀むことが出来る。

此邊は牛込の下宮比町と聞いた。心持ちのいゝ路を稍々後にかへつて來ると、飯田橋の通りの廣い路に出て、それを横切つて小路にはいると、今度は神樂坂の中程に出る。